

満洲の特異性と総力戦の誤解

- ・満洲の経済社会構造の特異性（『満洲暴走 隠された構造』p51~54）

中国の都市は基本的には城壁で囲まれていましたので「県城」と呼ばれます。その県城にすべての経済活動が集中している。農民は直接、県城に大豆を運んで来て、そこで売却して、日用品を買って帰っていく。こういう経済が満洲で成立している、というのです。

実は、中国本土と満洲とは、経済の姿がまったく違うのです。こちらはアメリカの偉大な地理学者・人類学者・歴史学者 G.W.スキナーが、第2次世界大戦直後に四川省で行ったフィールドワークに基づいて提唱した「**定期市ネットワーク**」です。

農村に定期市がくまなくあって、そのサイズも小さなものから大きなものまで三段階ぐらいある。定期市は近隣の定期市と開催日が重ならないように工夫されており、商人たちは複数の定期市を巡回することで売買を行う。**農村からやってくる農民を相手にする基層の定期市の上に、定期市の商人たちが拠点にする定期市町の定期市があり、さらにその上に県城の定期市がある……**という複雑なネットワークです。

この形は中国本土に関しては昔から指摘されていて、今でもある程度続いています。

ところがその定期市が満洲では非常に少ないのです。代わりにこの県城経済がある。となると県城、そしてそこにある鉄道駅に経済活動が一極集中する。有力な商人は村をぐるぐる巡回したりせず、みんな県城に住んでいる。そういう構造になっています。

私は両者の研究を元に詳しく調査しました。定期市のある県は京奉線沿線と朝鮮国境付近。県城にのみ定期市があるのは満鉄幹線鉄道沿線です。北満には定期市がほとんどありません。

つまり**満洲では県城と村が直接馬車接続されているというシンプルな形**です。

これに対して華北では、県城があって、定期市町があって、定期市の開かれる村々があり、普通の村がある。それぞれの村は複数の定期市町と繋がり、定期市町も複数の県城と繋がっている、ここの移動は徒歩か一輪車、こういう構造になっています。

この経済活動、コミュニケーション・パターンの違いが、満洲の中国人社会と、華北の中国人社会との違いを生みました。

地続きで、同じ中国人が主体でも、華北と満洲にはこれだけの「違い」がありました。

そしてこの「違い」こそが、日本の運命に大きな影響及ぼした、と私は考えています。

- ・「総力戦」は世紀の大誤訳（『満洲暴走 隠された構造』p107~109）

「総力戦」という言葉は聞いたことがあると思います。「第2次世界大戦は総力戦だった」と表現するのですが、実はこれは誤訳だと私は思うのです。これが日本を敗北に追いやったのではないかとおもえるほどの大誤訳です。

英語では“total war”。

普通 total を「総力」と訳したりはしません。『オックスフォード現代英語辞典』を引きますと「すべてを包括する (includ-ing everything)」と解説されています。ですから“total war”とは「すべてを包括する戦争」という意味なのです。軍隊や政府だけでなく、国民ばかりか大地や草木まで、すべて包括してしまう恐ろしい戦争のことです。

無理やり訳すなら「総合戦」「全体戦」とすべきだったと思います。

(中略)

本物の“total war”とは、参戦した国の軍事力だけではなく、**経済・政治・科学・技術・資源など、戦争遂行に関わるすべてのリソースが、不可避的に動員され、どちらかがそれを使い果たして、システムそのものが崩壊してしまうまで続く恐るべき戦争のこと**です。「総力を挙げてがんばれば勝てる」などというものではありません。このことを敗戦後70年経っても、私たちはまだ理解していないのです。(以下、慣例に従って致し方なく「総力戦」と呼びます)。